旧本多家住宅 長屋門・倉

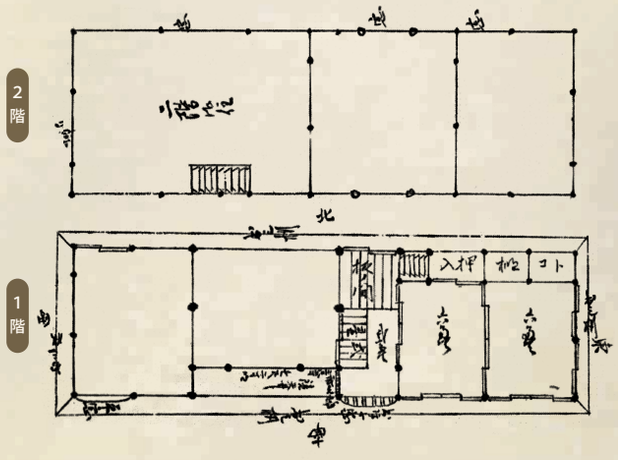
旧本多家住宅長屋門は、代々国分寺村の名主であった本多家の屋敷の入口に、表門と先代当主の隠居所を兼ねて、江戸時代末期に建築されました。同家には、弘化５年（1848）３月の「表御門御長屋仕様御注文」が残り、建物を建てようとした当時の細かい仕様が窺えます。

幕末から明治時代には、分家の本多雖軒が村医を開業して、教育や書画など多方面に活動する拠点として利用し、さらに大正時代以降には、建物を利用して養蚕を行っていたことも判明しました。

建築後、170 年近くの歳月がたち建物の劣化が著しくなったため、市では平成 27 ～ 29 年に保存修理工事を行い、１階西側の土間を管理室、２階を展示室として活用しています。

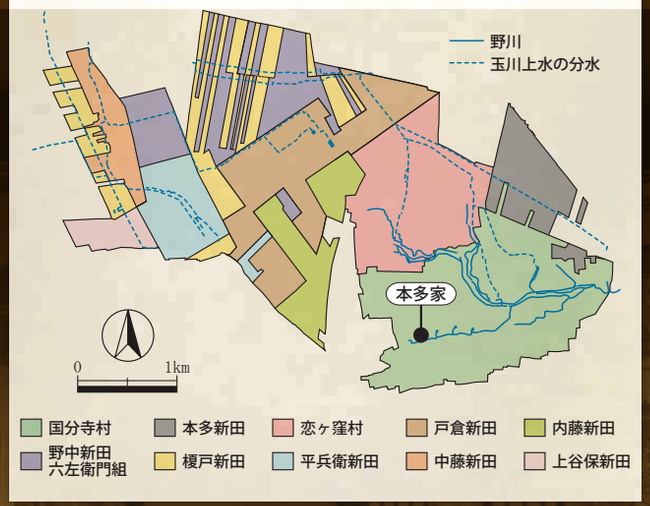
一方、屋敷地の西側にある倉は、桁行 4.5m・梁間 3.6mの木造２階建、切妻造鉄板葺の置屋根で、東面に出入口を有します。棟木には「維時宝永５年（1708）創建　明治 33 年（1900）12 月　三世本多良助全部新造（略）」の墨書があり、外壁は昭和の改修で、目地を切るモルタル洗出しとするなど、時代の流行を反映した建築物です。

◆表御門御長屋仕様御注文長屋門の設計図◆



近世・近代の国分寺村

◆江戸時代の国分寺市域の村◆



近世の国分寺市域には 10 の村があり、いずれも幕府の代官が支配していました。このうち、野川の源流を囲む国分寺村と恋ヶ窪村は江戸時代以前に成立した可能性があり、残る８ヶ村は享保年間（1716 ～ 1736）の新田開発により誕生した村です。新田村の多くは、多摩地方の各地から出作人が集って開拓しましたが、本多新田は国分寺村が中心となり作った新田でした。

国分寺村は水田に比べて畑地がそのほとんどを占めており、村高は約 460 石、戸数は 70 戸、人口は 350 人前後と、武蔵国内の農村としては平均的な規模の村といえます。享保 11 年（1726）から年番制であった村の名主役を本多家が代々世襲し、国分寺村名主が本多新田名主も兼任しました。

明治時代以降、幕藩体制に代わる新たな地方行政制度が始まると、国分寺市域の村々は韮山県と品川県に編入後、明治５年（1872）には神奈川県へ移管されます。さらに同 22 年（1889）に江戸時代の 10 村が合併して近代の国分寺村が誕生し、同 26 年（1893）には東京府北多摩郡国分寺村となって、現在の市域の原型が出来ました。

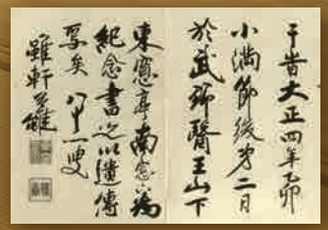
村医者・本多 雖軒

◆本多 雖軒◆

天保６年（1835）に国分寺村名主本多良助の四男として生まれた雖軒は、16 歳の時に下谷保村（現国立市）の医者本田覚庵のもとで医学・詩文・書画等を学び、その７年後には長崎へ遊学の旅に出るなど、充実した青年時代を過ごしました。

覚庵のもとを離れた文久元年（1861）に府中宿で医者を開業し、小川新田（現小平市）名主の娘ちかと結婚すると、慶応元年（1865）には国分寺村へ帰郷します。長屋門を拠点に村医者を営んだ雖軒のもとには、小平・府中・三鷹市域の村々をはじめ、多摩川を越えて八王子や町田市域周辺の患者も通院していたようです。

書家としても知られ、依頼に応じて多くの幟・扁額などに詩句や語句を揮毫した他、自ら書画会を主催するなど、生涯を通じて書画に対する情熱を抱き続けていました。また、府中宿時代には剣術・国学・和歌も習得するなど、北多摩郡を代表する知識人としても活躍しました。さらに、村の教育にも熱心で、明治 17 年（1884）まで訓導（小学校教員）と教導職を歴任し、同 43 年（1910）村医者を辞した後は、晩年まで書画や文筆活動に勤しみ、大正５年（1916）に 82 歳で亡くなりました。



◆雖軒の書と絵画◆